

妙一女御返事

弘安三年一〇月五日 五九歳

去ぬる七月中旬の比、真言法華の即身成仏の法門、大体註し進らせ候ひし。其の後
は一定法華經の即身成仏を御用ひ候らん。さなく候ひては当世の人々の得意候、無得
道の即身成仏なるべし。不審なり。先日書きて進らせ候ひし法門能く心を留めて御覽あ
るべし。其上即身成仏と申す法門は、世流布の学者は皆一大事とたしなみ申す事にて
候ぞ。就中予が門弟は万事をさしをきて此の一事に心を留むべきなり。建長五年より
今弘安三年に至るまで二十七年の間、在々処々にして申し宣べたる法門繁多なりといへ
ども、所詮は只此の一途なり。

世間の学者の中に、真言家に立てたる即身成仏は釈尊所説の四味三教に接入したる大
日經等の三部經に、別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏等と思ふ。是は七位の中
の十回向の菩薩の歡喜地を証得せる為體なり。全く円教の即身成仏の法門にあらず。
仮令經文にあるよしを尋るとも、歡喜行証得の上にて得たるところの功德を沙汰する分齊
にてあるなり。是十地の菩薩の因分の所行にして、十地等覺は果分を知らず。円教の
心を以て奪つて言へば、六即の中の名字觀行の一念に同じ。与へて云ふ時は、觀行即
の事理和融にして理慧相應の觀行に及ばず。或は菩提心論の文により、或は大日經の三
部の文によれども、即身成仏にこそあらざらめ。生身得忍にだにも云ひよせざる法門な
り。されば世間の人々は菩提心論の唯真言法中の文に落とされて、即身成仏は真言宗に
限ると思へり。之に依つて正しく即身成仏を説き給ひたる法華經をば戲論等云云。止觀
五に云はく「設し世を厭ふ者も下劣の乗を翫んで枝葉に攀付す。狗作務に狎れ、獼猴
を敬ひて帝積と為し、瓦礫を崇めて是明珠とす。此の黒闇の人豈道を論ずべけんや」
等云云。此の意なるべし。歎かほしきかな、華嚴・真言・法相の学者徒にいとまをつ
いやし、即身成仏の法門をたつる事よ。

夫先づ法華經の即身成仏の法門は竜女を証拠とすべし。提婆品に云はく「須臾の頃
に於て便ち正覺を成ず」等云云、乃至「變じて男子と成ると。又云はく「即ち南方無垢
世界に往く」云云。伝教大師云はく「能化の竜女も歴劫の行無く、所化の衆生も亦歴劫
無し。能化所化俱に歴劫無し。妙法經力即身成仏す」等云云。又法華經の即身成仏に二
種あり。迹門は理具の即身成仏、本門は事の即身成仏なり。今本門の即身成仏は当位即
妙、本有不改と断ずるなれば、肉身を其のまゝ本有無作の三身如来と云へる是なり。

此の法門は一代諸教の中に之無し。文句に云はく「諸教の中に於て之を秘して伝へず」等云云。

又法華經の弘ませ給ふべき時に二度有り。所謂在世と末法となり。修行に又二意あり。仏世は純円一実、滅後末法の今の時は一向本門の弘ませ給ふべき時なり。迹門の弘ませ給ふべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台・伝教こそ其の能弘の人にたましまし候ひしかども、それもはや入滅し給ひぬ。日蓮は今、時を得たり。豈此の所囑の本門を弘めざらんや。本迹二門は機も法も時も遙かに各別なり。

問うて云はく、日蓮計り此の事を知るや。答へて云はく「天親・竜樹内鑑冷然」等云云。天台大師云はく「後の五百歳遠く妙道に沾はん」と。伝教大師云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り、法華一乗の機今正しく是其の時なり。何を以てか知ることを得ん。安樂行品に云はく末世法滅時」云云。此等の論師人師、末法闘諍堅固の時、地涌出現し給ひて本門の肝心たる南無妙法蓮華經の弘ませ給ふべき時を知りて、恋させ給ひて是くの如き釈を設けさせ給ひぬ。尚々即身成仏とは、迹門は能入の門、本門は即身成仏の所詮の実義なり。迹門にして得道せる人々、種類種・相對種の成仏、何れも其の実義は本門寿量品に限れば常にかく觀念し給へ。正觀なるべし。

然るにさばかりの上代の人々だにも即身成仏には取り煩はせ給ひしに、女人の身として度々此くの如く法門を尋ねさせ給ふ事は偏に只事にあらず、教主釈尊御身に入り替はらせ給ふにや。竜女が跡を継ぎ給ふか、又僑曇弥女の二度来たれるか。知らず、御身は忽ちに五障の雲晴れて、寂光の覺月を詠め給ふべし。委細は又々申すべく候。

弘安三年十月五日

日蓮花押

妙一女御返事